

ウイグル族古代史詩『烏古斯可汗伝説』について

高 橋 庸 一 郎

はじめに

管見では『烏古斯可汗伝説』（以下『烏説』と简称す）はいままで日本語の翻訳本が出版されたことはないようである。中国でも全体的な漢訳本が出版されたのは、1982年4月に新疆人民出版社が刊行したのが最初ではないかと思われる。またこの後、別の翻訳が出されたということを知ったことがないので、この新疆人民出版社本が唯一の漢訳本である可能性が高い。

この漢訳本は耿世民氏に手になったものであるが、本文の漢訳ばかりでなく秀れた解説などもついていて、内容的価値の高いものとなっている。以下この耿世民氏の漢訳本をテキストとして考察を進めていく為に、ここにその体裁の概要を示しておきたい。

この書は表紙に『烏古斯可汗の伝説』と題し、下辺に「(維吾尔族古代史詩)」とあって、さらにその下に耿世民という訳者の名が記されている。全体的にはB5版六十頁余りの比較的小部なものである。巻頭十三頁は耿世民氏による導言が、1978年11月の日付で書かれており、それには『烏説』の歴史的解説、文学的特徴、また押韻などを中心とする表現上の修辭的技法の解説が簡潔に述べられている。十四頁以下二十八頁までが『烏説』の漢訳本文である。この後四十一頁まで、十二頁に亘っては、ウイグル語『烏説』のローマ字転写文となっており、ウイグル語による発音がすべて実際に解るようになっている。更にこの後部には、五十八項目の、漢訳本文部分に付された番号にしたがって、原文（ローマ字によるウイグル転写文）を基礎と

した注解がつけられている。そして更に最後に、ローマ字音順序排列による「詩彙表」が十頁あり、そのウイグル語のローマ字転写された一つ一つの単語に漢訳語がつけられている。そしてこの書の表紙のみひらき部分には附録という形で、二頁の回鶻文による『烏説』の断片が写真によって掲載されている。

この書は奥付に、「1980年4月第1版 1982年4月第1次印刷 印数：1 — 12000」とあるから出版されてからもう十五年以上経ていることになる。1995年6月段階で新疆人民出版社、及びウルムチ市内の各種書店でこの書が販売されているのを見かけていない。ここに紹介したものは、新疆大学図書館の蔵書になるものを復印したものである。

—

『烏説』を考える前提として、古代に於けるウイグル族史を簡単にたどってみると、次のようになる。古代ウイグル族は遠古の時代丁零と呼ばれて二支存在したと思われる。一支はバイカル湖の北、匈奴の北にあり、他の一支はパルカシ湖とオルチス河の間にあって遊牧をその生活形態としていた。これが大体秦から前漢の初ぐらいまでである。その後紀元四世紀に、丁零は南に遷り、東部丁零はオルコン河流域に遊牧し、西部丁零は天山北部と西部草原に遊牧するようになったが、この頃鉄勒という名で呼ばれるようになり、また高車、袁紇という名もこの頃出現するのである。その後高車の副伏羅部の首領阿伏至羅と窮奇は10余万の衆をひきいて車

師国前部の西北へ遷りここで自立して王となった。603年、それまで高車の北にあって再三高車を脅かしていた突厥の歩迦可汗が隋の軍隊に敗れ、大いに乱れることがあったので、鉄勒、僕骨など十余りの部族はことごとこの機に乗じて反抗した。この当時韋紇と呼ばれる部族は鉄勒の一部で、独洛河の北で遊牧していたがこの時僕骨、同羅、拔野古、覆羅と共同して突厥の圧迫に抵抗していたが、その首領は「俟斤」といい、自からその族を「韋紇」と言った。605年には西突厥の処羅可汗が鉄勒諸部を攻撃し、中でも鉄勒部の一つ、薛延陀の西長数百人を誅殺した為に、薛延陀の俟斤也咥は処羅としばしば戦ってこれを敗り、伊吾、高昌、焉耆などを味方につけたが、この時族名を回紇と改めたのである。そしてこの時特健俟斤が推されて君長となった。特健の死後、その子の菩薩が後を継ぎ、630年五千騎で東突厥の欲谷設の十万騎と馬鬣山で戦い、それを大いに敗り、トラ河に根拠地を置いて、自から活頡利発（英雄の意）と称し、回紇の威を大いに振ったという。以上がウイグル族の第一次盛強の時代に至る経過であるが、この後、744年に、回紇の首領骨力裴羅は、それまで連合していた拔悉密を破り、頡跌伊施可汗を斬って、742年に突厥の骨咄禄葉護を殺した後をついで自から立って骨咄禄毗伽闕可汗となった。回紇は牙帳を烏德犍山、オルコン河上流に立て、南に突厥の故地と離れ、葉羅葛など六姓を合せて、更にその後悉密、葛邏祿など全部で11の部族を統合して、第二次の盛強な時代となった。唐王朝内で起った安祿山の乱を回紇の葛勒可汗が太子に兵四千をひきいさせて乱平定を助けたのは757年のことである。759年葛勒可汗が卒して、次子の移地健が立ち、牟羽可汗と号したが、牟羽可汗も史朝義の乱の平定を助ける為に唐に兵を出している。この頃摩尼教が回紇の領域内に伝入しはじめる。牟羽可汗は唐から二人の女を娶ったが、779年には一部の摩尼教徒からそそのかされて唐を侵し、宰相の頓莫賀に攻め殺され、頓莫賀は唐からの策命を受けて武義成功可汗となった。788年に

は回紇は上表して回鶻と名を改めたのである。しかし790年、唐徳宗貞元六年には、回鶻の大相頡干迦斯が吐蕃に敗れ、北庭はことごとく失われ、この機の乗じた葛邏祿は、烏德犍山以西のフト川を取り、回鶻は南に移ってその勢力は衰退した。808年唐憲宗元和三年に、騰里可汗が卒し、保義可汗が立って唐朝により愛登里囉汨蜜施合毗伽保義可汗と策命され、その在位中に、吐蕃を攻撃して北庭、龜茲などの地を回復し、その武力は中央アジアにまで及んだという。これが第三次のウイグル隆盛期である。しかし、839年唐文宗開成四年には、回鶻相安允和と特勒紫革が謀って彰信可汗を殺し、更に加えてこの年は疫病が流行し、雪害、連年の飢饉が災した上に、羊や馬が大量に死に回鶻汗国の国勢は一気に衰えた。そして次の年840年、唐文宗開成五年には、回鶻の別将であった句録莫賀（黠戛斯人で現在のカルクス族（キルギス族）の祖先）が黠戛斯の10万の騎兵をひきいて回鶻を攻め、彰信可汗のあとに立った厖馭特勒可汗を殺し、その側臣を誅殺し、回鶻の本拠の部落をことごとく焼きつくした。そのため回鶻の諸部は離散した。十五部は西に奔って葛邏祿に入り、一支は吐蕃に投じ、一支は安西に奔って、ここに、744年以来烏德犍山、オルコン河上流に依って一時は強大な勢力を誇った回鶻汗国は滅亡したのである。

二

ウイグル族は古来文字を持たなかったが、その歴史的な過程の中で戦いという負の面も含めて突厥との接触が比較的頻繁であった為に、漠北の蒙古高原に回鶻汗国を成立させるようになった前後から、ウイグル人は突厥汗国が使用していた古代突厥文字を用いていくらかの文献を残した。その中で比較的有名なものは

『磨延啜碑』（『葛勒可汗碑』或いは、『回紇英武威遠毗伽可汗碑』とも称す。葛勒可汗は唐の玄宗天宝六年に骨力裴羅が卒した後を継いで位に即き、唐の肅宗

乾元元年に、唐朝より封ぜられて、英武威遠毗伽闐可汗と称せられた。安祿山の乱の平定に際して唐朝を助けて功があった。）

『磨延啜第二碑』（『増里亜特碑』とも称す）

『九姓回鶻可汗碑』（突厥文、漢文、ソグド文で書かれている）

『蘇吉碑』

『色維列依碑』

などがある。840年、回鶻汗国は滅亡するがその時回鶻は大体三支に分れ、その一支は長城附近にまで南下したが、他の一支は新疆のトルファン盆地に入り、そこに高昌回鶻王国を建てた。その勢力はまもなく焉耆、クチャー帯にまで及んだのである。古代エンギ人やキジル人は比較的高い文化を持っていたし、高昌には古くから中央の進んだ文化を持った漢族が入植していたから、この地のウイグル族も急速にその文化を高めることが出来た。

この高昌王国時代にウイグル人は、ソグド文を基礎にして新たな回鶻文を創制し、漠北時代に使用されていた古代突厥文字はだんだん使われなくなった。そしてこの回鶻文は、当時の新疆や中央アジアで広く通用する言語文字となっていたのである。この回鶻文によって書かれ、現在残っている文献には次のようなものがある。

(一) 文学作品

吐魯蕃民歌残卷

史詩『烏古斯可汗伝説』

戯曲『弥特里色米特』

『福楽智恵』（維也納本）

故事集『五卷書』残卷、『伊索寓言』（イソップ物語）（残卷、『十業道譬喩鬘』（大部頭仏教故事集）

(二) 宗教文献

（仏教関係）

『金光明経』

『俱舍論』

『妙法蓮花経』

『八陽神咒経』

『金剛経』

『華嚴経』

『阿弥陀経』

『勝軍王問経』

『仏頂尊勝陀羅尼経』

『聖一切如来頂髻中出白傘蓋仏田余無敵総特』

『大方便仏報恩経』

『般若波羅密多経』

『玄奘伝』

（摩尼教関係）

『二宗経』

『摩尼教徒懺悔詞』

（キリスト教関係）

『偽福音書』

『聖喬治殉難記』

(三) 医学文献

『色達薩拉』

(四) 社会経済関係、歴法天文、両種語文対照語書など

また十一世紀にウイグル族の著名な学者、馬赫木徳・喀什噶里（ムハメド・カシカリ — カシカリの人ムハメドの意）の著わした『突厥大辞典』や、近年出土した『トルファン民歌集』などの中には、当時民間には、口頭伝承文学や、民歌、英雄史詩、格言諺語などが豊富多彩に存在していたことが反映されている。『突厥大辞典』には多くの四行詩、双行詩がとられているが、学者の研究によるとこれ等の詩は、例えば英雄阿勒普通阿についての挽歌や征戦についての長篇話の断片であるらしいから、『烏説』とも恐らく何等かの関係があるかもしれない。因みにこの『突厥大辞典』は全篇七千条に亘る項目を網羅し、八巻から成っている。それぞれの巻は静詞、動詞の二部分から成り、例文を豊富にとり入れ、諺語、詩歌には詳しい注釈がつけられている。更に各語詞にはその用法と語法上の解説もつけられている。そしてその語がどの部族で用いられているかも明記されている。正文の前には長篇の自序があり、編纂目的、使用資料、体例、語法上の構造、回鶻字母などの他、

突厥人の分布、各部族の言語的特徴、突厥地区の円形地図までついているという。以上の点からみると、この書は「辞典」という名がついてはいるが謂わば当時の突厥に関する百科全書性格を持った著作だということが解る。ただ極めて残念ことには、1996年現在、現代ウイグル語、ドイツ語、トルコ語、ウズベク語に訳されただけで、他の言語には訳されないまま、いまはトルコのイスタンブール民族図書館に蔵されているといわれ、その全容はなかなか知られない。

回鶻文の文字は音標文字であるが、この文字の成立については多くの説がある。ロシアのラドロフは、キリスト教徒が使用していたシリア文字がアジアに入り、回鶻人は当時キリスト教を信仰していたので、シリア文字に基いて回鶻文を作ったのであるとした。しかしドイツのミローは、前文に掲げた唐代回鶻の首府哈喇巴喇哈遜で発見された鄂尔渾碑（オルコン碑）『九姓回鶻可汗碑』の中の新文字の残存部分と新たに発見されたソグド文の残片を比較研究した結果として、『九姓碑』の中の新文字は、回鶻文字よりも古い文字、つまりソグド文字であることが解ったので、回鶻文字はソグド文字を基礎として作られたものと考えたのであった。即ち紀元初にペルシアのアラム文字を基礎としてつくられたソグド文字は、回鶻文字の基礎となっていたのである。この碑銘の研究から理解された事は、この『九姓碑』が建てられた時は、多分突厥文字と回鶻文字の并用の時代であった。また回鶻が突厥の強い重圧下から脱れてまだ日の浅い時期であること、そしてソグド文字を取り入れつつあって、この二種の文字が并用されていたがまだソグド文字が突厥文字よりその使用勢力は劣っていた。更に8世紀には回鶻人はすでにソグド文字を変化させた文字を用いはじめていたということなどである。10世紀後半になると、新疆地区のカシガルにまずはじめてイスラム教が伝入し、十四、十五世紀には天山以南のすべての地域にこのイスラム教が拡大していくのであるが、それとともに回鶻文字はだん

だん廃止されアラブ文字にとって替っていくのである。しかし明代の『高昌館来文』、清康熙二十六年の重抄回鶻文訳本『金光明最勝王経』などを見ると回鶻文の使用は十七世紀にまで続いたことがわかる。更にこの文字の他民族文への影響について言えば、元代の回鶻文は蒙古族によってとり入れられ、後の蒙古文字となって現代に至るまで使われているし、また十六世紀以後、満州族はその蒙古文字を模倣して満州文字を作ったのである。『烏説』は上記の如き言語環境の中で著録されたものなのである。

三

『烏説』については耿世民の解説があるのでそれにもとづいて以下簡単に述べておく。『烏古斯可汗（ウコス可汗）伝説』は古代ウイグルの民間に伝承された散文体の英雄史詩である。散文の詩というのは、多くの部分は散文体であるが、一部は韻文によって書かれており、全体としては修辭的に詩の体裁をとっているということである。現存する唯一の回鶻文による写本は、フランスのパリ国民図書館に所蔵されている。写本は草書体の回鶻文で書かれており、頭の部分と末尾の部分が欠如している。大きさは19×13cmで、全二十一頁、四十二面、毎面九行。第一面第二行uxbu tururの二字の後に一頭の雄牛の画がかかっている。また第五面第九行のuxbu tururの二字の後に一羽の鳥の絵がえがかれている。更に第六面第四行のuxbu tururの二字の後に一匹の一角獣の像がえがかれている。この写本の綴りの特徴から、これを書写した人は、現代のハサク語と同じような方言を常用語とする人であろうと思われる。この写本に用いられている言語は晩期古代ウイグル語に属するものと思われるとされている。ただこの書は初めの部分が欠けている為に正式な書名が知られず、内容から、『烏古斯（ウコス）可汗伝説』とよばれているのである。残欠ではあるが最初の書き出しは、

人們都説

願他就是這樣
這就是他的樣子



從此以後他們生活得很愉快
一天，阿依汗眼發異彩
生下一個男孩

となっている。この部分は最初の部分が欠けている為に前部からのつながりがよく解らないが、ここに出した絵が先の解説で言及されていた三つの画の中の最初のものである。以下簡単にその筋書きを追うと次のようである。

(一)烏古スは四十日で成人になったが、彼は生まれた時のその姿は異形で、顔は青く、口唇は赤く、二つの目も燃える火のように赤く、また全身フサフサとした毛に覆われていた。

(二)そのうえ彼は雄牛のような腿、狼のような腰、黒貂のような肩、熊のような胸を持っていた。(この場合、雄牛のようにふとい腿、狼のようにガッシリとした腰、黒貂のように盛り上った肩、熊のようにぶ厚い胸、という意味なのか、それともギリシャローマ神話にあるような、雄牛そのものの腿、狼そのものの腰、貂そのまの肩、熊そのまの胸なのかは、漢訳文からは明瞭でない。しかし前文の全身毛に覆われていたという所から考えると、「そのまま」の可能性も強い。)

(三)当時森林の中に一匹の一角獣が住んでいて人や家畜を食い殺したりしていたが、何ものも怖れない英雄烏古スは鹿や熊をおとりとしてこの一角獣を退治した。

(四)ある日、烏古スが天に向かって祈りをささげていると、天上から一条の光が射して来て、その光の中に一人の娘が静かに坐っており、その娘は非常に美しく、娘が笑えば天も笑い、娘が泣けば、天も泣いた。烏古はその娘がすっかり気に入って結婚し、三人の男の子をもうけた。長男は、日と名づけ、次男は月と名づけ、三男は星と名づけた。

(五)烏古スはある日、また一人の娘が木のホラ穴の中に坐っているのを見た。その娘は非常に美しく、「眼は青空よりも青く澄み、髪は流れる水のようにしなやかで、歯はまるで珍珠のように白く輝いていた」のである。烏古スはまたこの娘がすきになって結婚し、三人の男の子を設けた。長男は天といい、次男は山といい、三男は海といった。

(六)その後、烏古スは国の可汗となった。下臣や人民に向って烏古スは言った。「予はお前達の可汗である。お前達は弓と盾をとって予の征戦にしたがえ。族標を我等がみちびきとし、蒼き狼を我等が戦闘の雄叫とせよ。願わくば予を林のごとくうち立て、願わくば狩獵地の馬に群をなさせよ。太陽を我等が旗幟とし、天空を我等がテントとせよ」

(七)その後、烏古スは征戦を開始した。東方の阿勒通汗は自から烏古スに帰服することを表明したのでこれと友好関係を締結したが、西方の烏魯木可汗は服従しなかった。そこで烏古スは大軍をひきいて討伐に出かけた。ある朝、冰山のふもとに野営した時、一匹の蒼い狼が光の中に現われて、自から烏古スの大軍の道案内をすることを願い出た。亦得勒河のほとりで両軍は激しく戦い、烏古スは勝利を得、烏魯木可汗は敗走した。

(八)その後、烏古スは女真を征服し、最後に身毒、唐古特、沙木、巴爾汗をそれぞれ征服した。

(九)年老いた烏古スはその領地を子供達に分封した。三人の子供達は東方の地に封じ、あとの三人の子供達は西方の地に封じた。そして前の三人の子供達が東方から拾って来た金の弓を三つに切って、三人の子供に分け与え、あとの三人の子供達が西方から拾って来た三本の銀の矢をそれぞれその三人の子供達に与えた。そして彼等に、「三人の長兄は弓であり、弓は矢を射るものである。」「三人の弟は矢である。矢は弓に服従しなければならない」と諭した。

(十)烏古スは自分の大テントの右側に四十尺の長さの木の柱を立て、その頂上に一羽の金

の鶏をかかけ、その足もとには一匹の白羊をつないだ。またテントの左側にも四十尺の柱を立て、その頂上に一羽の銀の鶏をくくりつけ、その足もとには一匹の黒羊をつないだ。そして四十昼夜の宴を開いた。

(十一)そして最後に烏古スは子供達に国土を分け与え、次のような言葉をはなむけている。「さあ、子供達よ、予が生きた年数は短くはない。予が経てきた戦いは少くはない。予は長い矛と弓と矢を以て戦った。予は駿馬にうちまたがって地のはてまでかけめぐった。予は敵をふるえあがらせた。予は友をよろこばせ、楽しませた。予は天帝が予に与えた職責を履行した。いまこそお前達に我が国土を分け与えよう……」

この後の部分は欠落していて、その内容は解らないが、恐らく烏古スの死が、一種の帰天という形で描かれてこの伝説は完成するものと想像される。

四

『烏説』は中国の内蒙古、新疆、チベットなどを中心とする北方西方少数民族の間での最も有名な民族伝承古代英雄史詩の一つである。モンゴル族には『江格爾』が、クルクズ族（キルギス族）には『瑪納斯』が、そしてチベット族には『格薩爾』が伝承されて来た。この三つは「三大英雄史詩」と呼ばれているが、ウイグル族のこの『烏説』はそれに次ぐものであろう。ただ、「三大英雄史詩」は、それぞれ何十万詩行からなる、一つ一つが膨大なものであるのに対して、この『烏説』は、前後に残欠があるとしても現在残されているものは、ウイグル語文として数えても三百七十八詩行であり、比較の上から言えば極めて小部なものと言える。三大詩も今の所は、『烏説』と同じように大体九世紀頃から伝承がはじまり、十四、十五世紀頃には完成したのではないかとされているのである。ではなぜ三大詩はその間に大部なものとなり、『烏説』は小部なものにとどまったのか。

そこには双方の伝承の条件が異っていたものと考えられる。一般に伝承文学は民間に広く長く流传する間に、伝承人達自身によって多くの故事が附加され、また他の多くの地方へ拡大されることによってその地方地方に伝わる他の伝承も包含して無限に広がっていくのである。その結果が、いま我々が見ることの出来る三大詩の姿であると言える。ということは即ち『烏説』はその伝承の時代がそんなに長くなかったし、その伝承範囲もそんなに広くはなかったのではないかと思われるのである。もう少し端的に言うならば、『烏説』はその伝承人が、その伝承を生み出した部族の中核部の極く限られた職能人だけに限定されていたのではなかったかということであり、またその伝承人達はある神聖な貴族達の中に、謂わば帝王学のような形で語っていたのではないかと思われる。またその為に伝承された地域もトルファン高昌の回鶻汗国の王都内の牙帳間のみであったかもしれない。そして本来なら回鶻汗国の滅亡とともに拡散していくはずの伝承者達が、拡散前に書写して残したのがこの成書としての『烏説』であったのであろう。故に一方では成書としての『烏説』が残り、一方では回鶻汗国から拡散して行った伝承者達による伝承があったものと思われるが、ただ一方に成書が存在するということは口頭伝承での野放図な増大化には一定の抑止力が働いたことであらう。

十四世紀ペルシャ、イリ汗国の宰相であり、歴史学者でもあったラシド・アテン・ファジロ・アラフ（ラ施特・阿丁・法茲勒・阿拉赫）の編纂した歴史書『史集』の中に次のような伝説がのせられている。

タラフハリに一つの部族が住んでいた。その部族の首領の名は、テキボク・ヤフイと言った。テキボク・ヤフイには四人の子供がいた。その名は、合刺汗、幹児汗、闊思汗、古児汗であった。彼等はみんな仏教を信仰していた。四人の子供のうち、合刺汗は父親の汗の位を継承した。後に合刺汗は一人の子供を設け、その子の名は烏古斯（ウコス）と言った。烏古スは長じてイ

スラム教を信奉し、彼の父親や叔父達と戦争のやむなきに至った。戦いで彼の父親は敗れて死に、ある叔父と氏族は彼に降り、またある叔父と氏族は東方に逃亡した。烏古斯はこの戦いに勝った後、祝宴典礼をとり行ったが、その時彼に帰服した人々に「ウイグル」という称号を与えた。その意味は、「彼は我々と力をあわせ、我々に協力し、我々を助ける」というのである。後にこの言葉がこの人々の後裔の族名となったのである、というのである。

この伝説には二つの特徴がある。一つはイスラム教徒となった烏古ス。もう一つはウイグルという族名の由来記となっている点である。前に述べたようにウイグル族は十四、五世紀にはほぼ完全にイスラム化するのであるが、この伝説は、成書化された後の烏古スが、イスラム化というウイグル族全体の変化を受け入れた後に変形したもう一つの『烏説』ということであろう。恐らくこの『史書』にとられた以外にも多くの「変形烏古ス伝説」が存在するにちがいない。『突厥辞典』や、『トルファン民歌集』、或いはウイグルムカムの中の史詩の部分などに見られる伝説には『烏説』の多くのバリエーションが見られるにちがいない。またウイグルの族名の淵源についての『史集』の説解は有名で、他の多くのウイグル族に関する書には常に引用されているものである。その解釈の結論には耳を傾けるべき点も大いにあると思われるが、そのもととなっている故事について言うならば、それは本来の『烏説』の最後の部分、即ち烏古スの六人の子供に、弓と三本の矢を以って団結を諭した烏古スの言葉が当然下敷となっているのである。つまり「ウイグル」の族名の成立については実際にはもっと別な発生譚があったはずである。

五

『烏説』の中には多くの古代性を見出すことが出来る。その一つは前述の内容の中の(七)に当る部で、狼の先導により戦いの為の道をたど

るという点である。もともとウイグル族は、狼をトーテムとして崇拝していた。『突厥大辞典』にも、ウイグルは生れた男の児を狼と呼ぶ習慣があるという。中国北方少数民族には、狼をトーテムとする民族は多く、例えば『魏書、高車伝』には、匈奴の二人の娘が狼に嫁ぐ話しが書かれているし、『周書・五十卷』には、厥欠族の嬰兒が狼に育てられ、長じて狼と結婚し、遂に十男を生むという話しが語られている。また蒙古族の一部がその族源を狼とするという話しはつとに有名である。『烏説』のこの部分は北方少数民族に共通する狼崇拝をあらわしたもので、ジライ・タウティ『ウイグル族のトーテム——狼に対する崇拝』は参考になる。

次にこの『烏説』に見られる宗教的側面を見ておく必要がある。姑麗娜爾氏は、『ウイグル族英雄史詩《烏古斯汗伝》研究に於けるいくつかの問題』の中で、この『烏説』は多くの場面でマニ教の影響が見られるとしている。マニ教の核心は光明崇拝であるとし、前述の内容の(四)(五)でそれぞれの美しい娘が光の中で坐っているというのがその典型的な表われであるとしている。また上述の蒼狼が突然烏古スの前に出現する時も、その表現は「一筋の光がさして」となっており、これもマニ教信仰から来るものであると述べている。しかしその周辺の描写を細かくみると、これ等は必ずしも「光明崇拝」ではない。光の中からある人物が現われる、或いはある神格を有する存在が光とともに登場するというのは、なにもマニ教に限ったものではなく、仏教にしろ、キリスト教にしろ、その他の多くの宗教の中に見い出すことが出来る。故にこの『烏説』の場合の「光」も、極めて原始的なシャーマニズムの表われと見た方がよいであろう。つまりウイグル族が未だ特定な宗教を獲得する以前の古代的信仰から来るものと考えたほうがよいであろう。

『烏説』はウイグル族の古色を濃厚に残している伝承である。最後にその「伝承」性についていくつか述べておく必要がある。前に書いた如く、『烏説』は散文の部分と韻文の部分から

なっている。特に前述(六)の部分は極めてはっきりした韻文である。更に(十一)の部分は白科の前に、啊という感嘆詞がついて更に韻を踏んでいる。こうした部分はあきらかに人々の前で演唱されていたということを推測させる。本来この『烏説』は、他の「三大英雄史詩」と同じく全体が職能集団によって演唱されていたのであろうが、それが何等かの理由、特に宗教上の環境的抑圧によってごく限られた人々の間にのみ行われ、その間に躍動的な部分、或いはより静寂な場面を除いて外は、つまり詩として最もふさわしい部分を除いて外は散文化していったものと思われる。また更に『烏説』には繰り返しの表現の部分もいくつかある。例えば、(三)の一角獣を退治する所では、角、熊をおとりするのであるが、その時の所作はくり返しである。また(四)と(五)は、二人とも美しい娘で、二人とも光の中に坐っており、そしてこの二人ともそれぞれ三人の男児を生むという点でははっきりした繰り返しである。こうした繰り返しの表現は、口頭伝承では常見されるものである。

もう一点『烏説』の古代伝承性を表わしているのは、突厥語の部族名及びその淵源を説明している箇所が数ヶ所にわたって見られるということである。古代人にとって部族の名の由来を知るといことは、その部族を知るといことであり、その部族の歴史やその部族の淵源全体

を認識し把握するということを意味した。この『烏説』に限らず、世界的に古代伝承のうちにはこうした現象が見られ、日本の『日本書紀』や『風土記』に見られるのと全く同じと考えられる。この点から見ても『烏説』は古代の伝承性がある部分には強く残っていると言えるのである。

六

『烏説』については、まだまだ研究されねばならない点が多いし、またこれから多くの研究者がウイグル族の中から出て来ることが期待される。特に今はまだ殆んど知られていない、他のウイグル、或いは他民族の伝承故事と、この『烏説』との関連が比較的の研究されていけば、更に興味ある展開が得られるものと思われる。

参考文献

- 耿世民『烏古斯可汗の伝説』新疆人民出版社、1982年。
編写組「維吾尔族簡史」『維吾尔族簡史』新疆人民出版社、1991年。
朱涛「史詩『烏古斯可汗の伝説』の美学旨趣」『西域研究』、1991年第1期。
郎櫻「我国三大英雄史詩比較研究」『西域研究』、1994年第3期。
姑麗娜尔「維吾尔族英雄史詩『烏古斯汗伝』研究中的几箇問題」『喀什師院学報』、1994年第1期～第3期。

(1996年12月13日受理)